

私の手に一枚の写真があります：牛に牽かせた荷車が坂道を登っている写真で、荷車の上にはおばあさんと小さな男の子が乗っています。そして、その男の子と同年齢くらいの女の子がふたり歩いています。1998年6月に黄河河畔に取材に出かけた折、偶然出会って写した写真です。私が道端で休んでいますと、坂の下からギイギイと車輪をきしらせながら牛車が上って来ました。登り坂なので、二人の女の子は車から下りているのですが、男の子はおっとりと車に乗ったままでした。

牛車の傍を歩いていた二人の女の子はなかなか探し出せませんでした。写真はいつもカバンに入れてあって、親しい人に会うたびに、訊いたりしていましたが、やっとその努力が報われて、この二人の女の子は黄河河畔の北山村の村の子ども達だと教えてくれた人がいました。2002年8月、私は北山村でこの二人の女の子に出会い、この二人の姉妹の一人は“反反”と呼ばれており、戸籍名は馮艶花ということ、もう一人は、“改改”といい、戸籍名は馮艶蘭ということ、彼女達の上に二人のお姉さんがおり、一人は飛飛、もう一人は鶴鶴、下には更に丁丁という妹と伯伯という弟がいると分かりました。この一連の名前には何か意図的なものがありそうです。そして5人の姉妹がオンドルの上で伯伯を取り巻くように一緒に写真を取る際、この家での伯伯の地位が分かるようでした。

2003年の春節は、私は黄河河畔で過ごしていました。目的の一つはこの地の人々の年越しの習俗を体験することで、二つ目は、春節は“家族全員集合写真”を撮影する最もよい機会だということです。陝北では、元日は家を出ない、正月2日は村を出ないという習慣がありま

す。正月2日、私は撮影器機を全部背負い北山村を訪ね、まっすぐに反反と改改の家に向いました。

案の定、家族全員が窑洞におり、いつもは延安で保母をしていて滅多に会えない長女の飛飛も帰っていました。子供たちの父親との取りとめない話の中で、この子達の名前を付けるにはずい分頭を悩ませて、彼が中学を卒業していたのが幸いしたのだと知りました。彼は三人目の子どもが生まれて見ると女の子だったのでいささか焦り、上の二人の娘の飛飛も鶴鶴も家に男の子を連れて来ないなら、この子は反反と呼んで、逆になることを願い、四人目が男の子になるよう希望を繋いだのです。けれども4人目もやはり女の子で「前非を悔い改め、真人間としてやり直そう」と、この子には改改と名づけました。ところが5番目もまた女の子だったので失望はこの上なく、もう此処できっぱりと“釘”を打ってしまおうというので名前を丁丁としました。そんな真心が通じ、遂にその後男の子が生まれ、名前を“伯伯”としました。“伯”は古代中国では兄弟間で長男を指し、順次、“仲”、“叔”、“季”となります。

名づけに悩みそのありったけを使い果たしたとはいえ、それぞれの名前に父親の心の状態が見て取れるようで、学校に行って勉強したお陰といえるでしょう。正直な父親は、六番目の伯伯が生まれる前にもう一人女の子が生まれ、この子は2ヶ月目に人に貰われたと私に漏らしました。私はこの子に何と名づけたのか知りたくて、名前をつけたかどうか訊

正月間“全家福”(2003年2月)





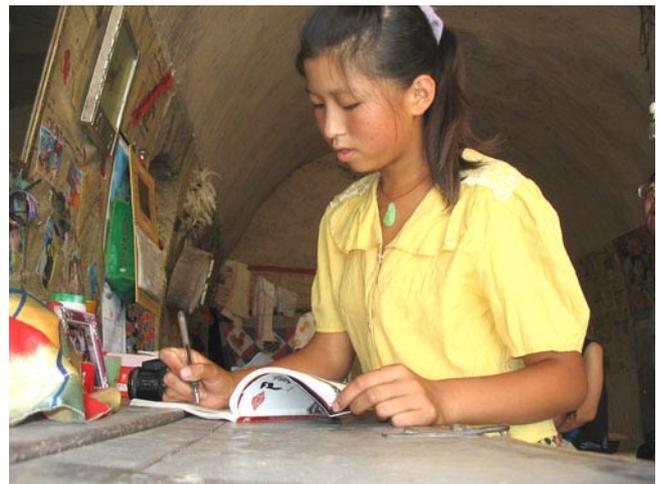
ねました。父親は、小さかったから名前は付けなかったと答えました。「今年何歳ですか？」と訊きますと、42歳とのことでした。

この度はどうか反反、改改一家の家族全員が揃った家族写真が撮れました。大家族8人が自分の家である窑洞の前に並びますと、“伯伯”はもう5歳か6歳というのに、相変わらず大切な保護対象で父親の懐に抱かれました。帰りしなには私は冗談で父親に言いました。「若し、この伯伯が女の子だったらどうするつもりだったの？やはり生み続けるの？」父親は笑い、周りも笑いました。しかし、父親の満足げな笑い顔に一抹の苦味があるようでした。

2004年7月、私は再び北山村に行き、反反、改改の家を訪ねました。父母は山の畑に行っており、長女の飛飛、次女の鶴鶴は仕事で家を出てしまっていました。三女の反反は既に学校を止めてしまい、家事全般を任された存在になっていました。四女の改改、五女の丁丁は県の学校に通い、家族の宝である六番目の伯伯ももうすぐ小学校一年生になります。ちょうど畑から戻って来た父親も加わ

り、私は又この家族の集合写真を撮影しました。彼はいつものように子供たちの真ん中に立ち、タバコをくわえて、いかにも満足そうな表情でした。この後、私は反反と改改姉妹と一緒に写真を撮りました。言ってみれば彼女達がいたから、この家の人たち皆と知り合えたのです。

現在の中国で、貧困線下の家庭、特に西部の未発達地区の農村の家庭では子沢山は普通です。しかし、この地を守って生きる善良で誠実な農民を簡単に責めることは出来ません。彼等は土地と家族数に応じて税を納入していますが、国によるどんな福祉労保（福祉と労働保険）の待遇も受けてはいないのです。特に老齢となって歩行もままならなくなった時、彼等は一口の水を飲むのさえ思い煩うかも知れません。「子どもを育てて年を取ったら面倒をもらい生涯を終える」というのは、心の深いところで受け継がれてきた（農民の）気持ちであり、他の方法を見つけることが出来ないという現実もあるのです。（田井記）



反反 2004年7月



お姉さんと本を読む改改 2004年7月



左から 改改 伯伯 反反 隣の家の子 鶴鶴 2004年7月